

兵庫県現代詩協会 会報 39号

2016年7月1日 発行 たかとう匡子

◇第20回定期総会報告

5月9日(日) ラッセホールハイビスカスの間において、午後1時30分より総会が行われた。今年度は協会設立20周年にあたる。当日、たかとう匡子会長は体調を崩して欠席された。時里二郎副会長がすべて代行した。開会の挨拶は時里二郎副会長が述べ、この協会は緩やかな繋がりで当初からスタートした、この緩やかさをこのまま続けながら、一つの団体として歩んでいくということ述べられた。

神尾和寿理事が議長として選出され、委任状を含め会員の3分の1以上の出席を確認して議事に移った。今年度事業報告、今年度決算、来年度事業計画案、予算案、1部規約改正案は総意を得て全て承認された。その後、大橋愛由等常任理事よりアンソロジーについての説明と、巻末に載せる設立から20年間の会員及び神戸の詩人たちの年表作成について、協力を呼びかけた。

第2部に移り、玉井洋子常任理事の司会で会員の永井ますみさんによる講演会が行われた。演題は『万葉集と大伴家持』—大伴家持さん私をそこに連れてって—。映像を使って講演をされた。(要旨は別欄)講演後、永井氏の朗読と筑前琵琶の演奏及び歌が披露され、琵琶の音色が心に響き心地よかった。

第3部朗読会は司会の丸田礼子常任理事により進められた。自作詩朗読者 渡辺信雄、和比古、季村敏夫、佐藤勝太、田中伸爾、森田美千代の各氏。

閉会の挨拶は時里二郎副会長が述べられ16時30

分に終了した。その後、がんこ寿司で懇親会が開かれ、大橋愛由等、大西隆志両常任理事の司会でなごやかに過ごした。

総会出席者・飛鳥井れん、尾崎美紀、青木左知子、井之上幸代、大西隆志、大橋愛由等、安西佐有理、岩井八重美、季村敏夫、和比古、小西民子、香山雅代、神尾和寿、神田さよ、北野和博、佐藤勝太、佐伯圭子、鈴木賀恵、関はるみ、坂本久刀、谷田寿郎、田中伸爾、時里二郎、玉井洋子、高谷和幸、永井ますみ、野口幸雄、にしもとめぐみ、藤井清、福田知子、増田まさみ、森田美千代、松下玲子、丸田礼子、三宅武、渡辺信雄以上会員36名 委任状 82通
講演からの参加 会員以外7名 懇親会参加 17名



時里二郎副会長

2016年度活動計画

- ・総会
 - ・役員選挙
 - ・ふれあいの祭典詩のフェスタひょうご
 - 10月2日 講師高橋陸郎氏
 - ・アンソロジーの発行(協会設立20周年記念号)
 - ・兵庫県現代詩協会設立20周年記念祝賀会
 - 「ひょうご現代詩集2016」出版記念会
 - ・ポエム&アートコレクション展
 - ・読書会 2回
 - ・会報発行 7月・12月
 - ・名簿発行
 - ・ホームページ更新・活用
- 以上の十本の柱をもって運営する。

(報告・神田 さよ)

◇予告

2016年度 ふれあいの祭典
詩のフェスタひょうご
10月2日(日) 13時30分
講演 高橋陸郎氏
演題 「女性詩の力に導かれて」

高橋陸郎プロフィール 昭和12年生まれ。「ミノ・あたしの雄牛」を発表し「薔薇の木・にせの恋人たち」で詩壇に登場。ブッキッシュな認識を土台に現代の神話エロスの形而上学を形成する詩風。「王国の構造」で藤村記念歴程賞。「兎の庭」で高見順賞。句集「稽古飲食」で読売文学賞。「旅の絵」で現代詩花椿賞。「永遠まで」で現代詩人賞。「和音羅読」詩人が読むラテン文学」で鮎川信夫賞(詩論集部門)。ほかに小説、評論など。福岡県出身。福岡教育大卒。

※8月中に詳しくお知らせします。是非ご参加ください。

総会 第2部
永井ますみ『万葉集と大伴家持』大伴家持さん私をそこへ連れて行って」

講演趣旨

永井ますみ氏の講演は『万葉集と大伴家持』大伴家持さん私をそこへ連れて行って」と言う演題で展開され、琵琶奏者渡辺幸子氏による筑前琵琶演奏が華を添えて最後印象深いものになった。

永井ますみ氏は1948年生まれで、詩誌『リヴィエール』同人『現代詩神戸』編集担当。現在までに詩集『ヨシダさんの夜』『弥生の昔の物語』『短詩集』『愛のかたち』『永井ますみ詩集』新・日本現代詩文庫110』などがあり、エッセイ集としては『弥生ノート』がある。詩集『愛のかたち』で第21回富田碎花賞受賞。2000年ごろからビデオ撮影と編集に興味を持ち、最近「詩朗読きやらばん」と称して朗読ビデオ撮影と編集のため日本全国を駆け巡る。2011年から詩の方向を弥生時代から万葉集の時代に転換して書いている。

まず、万葉集の成り立ちを永井氏なりに分析し（仮説1、大伴家持の個人歌集だった）（仮説2、藤原種継暗殺事件の時、家財と共に書物も没収された）という仮説を立てられ展開された。それは永井氏得意のPCのエクセルを駆使して歌の作者を分析したり、円グラフで家持の歌、親類縁者の歌を割り出し、また色分けした年表などを作成、スクリーンに写し示された。その分析によれば、大伴家持と明記されている歌が、447首、全体の11%を締めていることに注目し、またその歌には日時、場所、作歌時の気持ちなどが書かれていることもその根拠としている。そして、家持関連とされている歌が17%あること、縁者の内、特に叔母（父親大友旅人の腹違いの妹）の手ほどきを受けたことを挙げ、それらも記録されたものではないかと推測し、仮説の根拠としている。

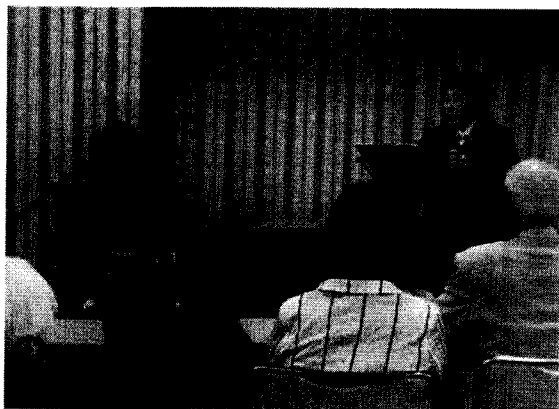


万葉集が昨今、多くの人人によって研究され続けていることは周知のことだ。そこに一説を投げている永井氏が、近年万葉集を取り入れて詩を書いていることはよく知られていることである。詩の展開には永井氏の想像力と筆力が大きく働いていて、良い仕事になっていると思う。そして今回の演題に注目し、大伴家持に関わるようになった動機を聞いてみたいと思つていたところ、丁度出席者の女性のひとりから同趣旨の質問があつた。多分「大伴家持のどこに惹かれたのか」というようなものだったと思うが、その質問に対して永井氏は「記録性を重んじたこと」と、もうひとつ「家持は、ひらがなに多く接することはあつたが、漢字を学ぶ機会が少なく、恐らくコンプレックスがあつたのでは。自分が詩を書くのもコンプレックス故」と動機の一つを吐露していることが、演者らしいことばとして筆者の心に残つた。

もう一点注目したのは、大伴家持が「藤原種継暗殺事件」の首謀者としての嫌疑をかけられていたが、（死後、一家持の死後20日後に事件は起きた）20年の後に無実が認められる（歌集が焚書されなかったのは、政治的なところが一つも無いものだったから、と永井氏の資料にある。変遷する政治の中で生き続けていく書物とは？

文芸に関わる者の多くが一度は考えることだろう。最後に永井ますみ氏による大伴家持らの歌の朗詠と琵琶の演奏があつた。「朗読詩の中に取り込んだ万葉集」として十首ほどレジュメで紹介されている。朗詠と朗詠の間に挟まれた、歌の背景の朗誦と、渡辺幸子氏による筑前琵琶の演奏と奏者による澄んだ朗詠が印象深く華を添えた。がしかし、大伴家持の歌（海行かば 水漬く（みづく）屍（かばね） 山行かば草生（むす 屍 以下略）の歌が入っていることについて、質問もあつた。この歌は、先ず家持の歌であるという記憶より、むしろ戦時下で伝え聞いた記憶がある人が多く、出席者からそのことについての言及があり、永井氏からは「それは、利用されたでしょうね」と、いう応答があつた。この歌が家持の職業柄（兵部少輔他）生まれた歌であること、利用されやすい内容や言葉が使われていることに、いまま少し丁寧な解説があつたら良かったとも思う。

（佐伯 圭子）



◇2016 第五回ポエム&アートコレクション展の 報告

1月9日～19日

■年始恒例の展覧会が、十日間の日程で神戸文学館で開催された。昨年度の会期より四日間短縮されたが、来館者は結構多く、連日賑わった。

出品者 19名 作品数22名

出品者 阿部由子 井之上幸代 和比古 大橋愛由等

大西隆志 香山雅代 佐藤勝太 谷田寿郎

鈴木渚 西海ゆう子 福永祥子 牧田榮子

眞田千穂 松下玲子 丸田礼子 山本真弓

永井ますみ 水こし町子 由良佐知子

■兵庫・詩の現在展 事務局に届いた会員の詩集・詩誌が展示された。

■兵庫・神戸を生きた詩人を語る
詩と音楽の出会いコンサート

展覧会の特別イベントとして1月16日(土)の午後二時から講演会が開催された。講師はたかとう匡子さん。「兵庫・神戸を生きた詩人を語る」というテーマは、足立巻一、綾見謙に次ぐ同じシリーズの三回目、今回は中村隆についてだった。一九二七年神戸生まれで、詩集「不在の証」や「詩人の商売」等で知られる中村隆は、家業の中村金物店を自営していた。激しく時代が動くなかで中村は生活に根を下ろし、金物屋の主人に徹して詩を書いた。生活の機微をとらえていきながら、生活のレベルを押し上げていく中村隆の詩人としての反骨、その詩への熱情に迫る講演だった。

講演終了後、「詩は音楽によってどのような変化を見せるのか」をテーマに、音楽家の甲斐誠三さん、甲斐恵子さんによるコンサートが開催された。北原白秋の

「この道」や中島みゆきの「麦の唄」などの作品を通して、言葉と声と楽器のコラボレーションを共に楽しんだ。参加者は73名と盛会だった。

次回予定 第六回 2017年1月14日～24日

(丸田 礼子)

◇第4回文学紀行報告

飛鳥散策

二〇一六年三月六日。生来、好奇心の固まりだけで中身は空洞だと思ってる毎日、飛鳥散策の文学紀行の出発の日を楽しみにしていました。

弥生とは名のみ朝夕は肌寒く心なしか固き蕾の膨らむ桜花の如き心境に、バスはお構いなく一路、ノンストップにて大阪の街を通り抜けて、南阪奈道路から葛城ジャンクションを経て最初の訪問地の「今井町」に到着。近鉄極原駅の沿線に有り大和三山の近くらしい。

今井町は「重要伝統的建造物群保存地区」に平成五年一二月に選定されて、天下を争う織田、豊臣、徳川の戦国時代に一向宗本願寺の坊主の「今井兵部卿豊寿」の寺を中心に城塞都市の形態を整えて、戦乱を逃れた由、かつて「大和の金は今井町に七分」と云われたほど、繁栄した町で現在も五百軒もの町家が連なり、町全体が江戸時代の姿を残しています。

三々五々に町中を散策しましたが、塵ひとつなく軒下には、可憐な花鉢が色とりどりに微笑みかけて昔ながらの生業を伝えながら、整然とした中に古式爽然と風情を醸し出して時を忘れるかのひとときで、忍者よろしく迷路の街並みを抜け出しました。

折りある毎に訪ねたくなる悠久の都は、「あすか・飛鳥・明日香」。遠い昔、見渡すかぎり稲穂が黄金に輝いて法隆寺の塔が厳かで、遙かに東の若草山がかすみ大仏さまやシカが懐かしいのです。

私たちの訪れた飛鳥寺は静かな場所の農村地帯でし

たが、日本最初の寺で本尊は飛鳥大仏(釈迦如来像)です。

日本に仏教が伝来したのは飛鳥地方を都とした推古朝前後の時代の六世紀から七世紀半頃。古代の日本の歴史は「記紀」に「天孫降臨の神話」が語り継がれて、天皇を神として崇められた時代の側近の神教派と、仏教伝来を推す仏教の側近との争いは国政を二分する重大事件があった。

「クーデター」の勃発は曾我氏と物部氏の争いとなり、寺の焼き討ちやら、寺を破壊したり、方や崇峻天皇の暗殺をしたりと静かな山村は、阿鼻叫喚の地獄であつたことだろう。

飛鳥寺の創建時は塔を中心に東西と北に金堂を配し外側に回廊を、更に講堂を含む壮大な伽藍であつた。飛鳥寺の西側の田の道の一角に、蘇我入鹿の首塚があり無念の音が聞こえる。蘇我氏と物部氏の争いはどちらが善でどちらが悪なのだろう。

昼食は、日本料理「膳」にて、優雅なおもてなしの春の食材は、湯葉、筍、蒟、菜の花、天ぷら、釜飯、



3月6日(日)文学紀行参加者18人 飛鳥寺にて

に宮人のほほえみ。

昼食は、日本料理「膳」にて、優雅なおもてなしの春の食材は、湯葉、筍、蕨、菜の花、天ぷら、釜飯、に宮人のほほえみ。

午後は万葉文化会館へ見学、神代の時代より古人は海の幸、山の幸を求め陸路、海路を駆け巡り、三韓征伐も運良く勝ったとか。朝鮮国の新羅・百済との交流を深めて「阿直岐」(あちとき)はシナの経典を読み、「王仁」(わに)は学者で日本の漢字の始まりとなる。結果、宗教・学問・芸術・文化・産業・工業等の礎となった。

徒歩にてカメ型石造物、飛鳥板蓋宮跡(壬申の乱)を見た後、天武天皇即位、律令制の確立などの説明を受ける。石舞台古墳(日本最大の石室を持つ)は蘇我馬子の墓の可能性ありとか、高松塚古墳(七世紀末、八世紀初)は貴人の墓との話を聞く。

ポランテアガイドの説明の最後に、高松塚古墳の壁画には極彩色で男女のすがたが描かれてあり、朱雀・青龍・白虎・玄武の四神図と、天文図などは日本の墓にはありません、とのこと。古代には近隣の国との交流などでたくさん渡来人が来日して、又は日本から隣国に渡った時代があり、他国の歴史にも目をむけるべきでしょう。

(井之上 幸代)

『画家の詩、詩人の絵』絵は詩のごとく、詩は絵のごとく』に参加して

桜便りが待ち遠しい、三月二十一日。姫路城の桜はあと数回あつたかい風が吹けば膨らみ始めるそんな一日でした。

姫路美術館でユニークな展覧会が開催されています。『画家の詩、詩人の絵』です。この展覧会は神奈川県平塚美術館より始まり、全国各地を巡回するものですが、関西では姫路だけで行われるものでした。

そんな記事を目にした大橋愛由等が姫路在住の大西隆志と高谷和幸に話を持ち寄り、何かイベントをしてみないかということから始まり、何ヶ月も前から実行委員会を持ち、資料を作りパネリストを選び、集まった皆さんに楽しんでもらう交流会の設定や食事の準備、協賛してもらえるお店探しと裏方は、大変だったようです。

華やかにシンポジウムが開催され、会場には展覧会を先に見てきた六十名ほどの人数が集まりました。姫路美術館の学芸員の高瀬晴之氏の作品集め苦労話、翻訳家鼓直氏にまだ訳されていない貴重な詩画集を見せていただいたり、時里二郎氏は詩を書く立場、中居真麻氏は絵も小説も書く、原田哲郎氏は絵を書く立場からそれぞれの思いを語って下さる。美術史などを手がける京谷裕彰氏が上手にいろいろなお話をまとめて、とてもとても予定の時間では足りませんでした。

私は長谷川利行の絵と詩が印象に残りました。以前東京の不忍池の辺にあった利行の詩碑を思い出したからです。パネリストの先生にも会場の絵や詩の話を少ししていただきました。

名残惜しい会場を後に大手前公園を歩いて、納屋工房へ、さあ乾杯の音頭というのに、ビールが間に合いません。上手な司会の時間つなぎにようやくビール登場！ひとりひとりのプチ挨拶も歓談の声にかき消される盛況ぶり。二次会のイギリス風パブにもたくさん流れ、シンポジウム成功の心地よい疲れと、春風と酒の酔いに夜道はどのように暮らしていったのでしょうか？このような楽しい会が又姫路で神戸で催されることを祈りながらおしまいにします

(にしもと めぐみ)

◇読書会について

第八回読書会「三好達治の詩について」、第九回読書会「草野心平の詩について」の報告は次回に掲載します。

◇『ひょうご現代詩集』とアンソロジー年譜「二〇年のあゆみ」について

兵庫県現代詩協会は二〇一六年(平成二八年)に発足二十年を迎えました。その記念事業のひとつとして、アンソロジー『ひょうご現代詩集』の中に、「兵庫県現代詩協会 20年のあゆみ」と題する年表を作成し掲載します。

会員の皆さまに、協会が発足した一九九七年から発行した刊行物の情報を提供していただきたいのです。詩集、評論集、エッセイ集など。詩誌、エッセイ誌、文芸誌なども含みます。

なお、物故した会員、退会した会員の情報も求めています。会員外の資料も網羅し、文化史的に意味のある年表になるようにしたいと考えています。

かつて、兵庫県の現代詩の年譜といえば、一九八四年に神戸新聞総合出版センターより出版された君本昌久・安水稔和編『神戸の詩人たち―戦後詩集』の年譜や、一九六七年に日東館より出版された蜘蛛編集グループ編『一〇〇年の詩集 兵庫・神戸・詩人の歩み』の年譜もあります。最近では、季村敏夫の労作で神戸のモダンイズム詩史を編みなおした画期的な『山上の蜘蛛(くも)』『窓の微風』(みずのわ出版刊)もあります。

兵庫県現代詩協会がスタートするきっかけとして、一九九五年に発生した阪神・淡路大震災があります。本格的にスタートを切った一九九七年からの保存記録としてのアーカイブとして、詩史年譜が後年意味を帯びてくると思います

◇今回の『ひょうご現代詩集 二〇一六』は、会員は詩作品掲載無料です。以前のアンソロジーは掲載料が必要でしたが、今回は二〇周年記念でもあり、会員全員参加のアンソロジー詩集としたいと思っています。作品募集の葉書発送は八月中旬頃としています。作品原稿締切は一〇月十六日とします。年表資料共に左記へ。

※大橋愛由等・☎090-5088-1840
E-Mail:maroad_kobe@yahoo.co.jp

最晩年の竹中郁

季村 敏夫

日本のモダニズム詩の一九二〇年代と三〇年代には、断絶がある。これは海野弘の卓見である。断絶の理由を竹中郁及びその周縁、或いは、彼らから遠い位置の詩人に即し問い直してみる。このことを促されたのは三度あった。最初は、『山上の蜘蛛―神戸モダニズムと海港都市ノート』（みずのわ出版）と『窓の微風―モダニズム詩断層』（同上）をたて続けに上梓したとき。二度目は巫騎保や小林武雄らの『神戸詩人』五冊及び竹中郁らの第二次『羅針』十冊などの翻刻（都市モダニズム詩誌二十七巻『神戸のモダニズム』）ぬまに書房）をすすめていたとき。三度目は現在である。これまでの試み、そのモチーフや成果、今後の課題などを公開の場で議論したい、今般、関西学院大学の大橋毅彦氏らの「神戸近代文化研究会」から要請された。声がかかれば、ひき受ける。これは、阪神大震災後の自分に命じた作法だったので即座に従った。だがたちまち、思考の難澁が始まった。これまで、モダニズムをタイトルに付加したり、拙論で何度も繰り出してきたが、そのことへの懐疑が襲ってきたからである。竹中郁や神戸詩人事件に関する言説に触れたとき、必ずといっていいくらい眼にするのがモダニズムである。そのとき、ぼくはいつも何がしかの違和、ずれのようなおもいを抱いてきた。何がしか、こう書くのはなぜか。ずれば、モダニズムという言葉の前に立ちすむからなのだが、この言葉の選択を自明にしない、自分にとつてのモダニズムを明らかにさせる、いいかえれば、行使する言葉と言葉の行使を同時に疑う過程を徹底させる、という自省が訪れた。

たとえば、お洒落、ハイカラなどという形容はふるいにかねばならない。そのとき、山本俊幸氏のこんな声が聞こえてくる。「ファッショニ性を抜きにして

は、昭和初年から十年ごろまでのモダニズム詩を語ることは出来ない。もし、このファッショニ性を除いてこの時代の詩を語るうすれば、それは片手落ちというものだろう。」〔註〕

確かに一九三〇年代のモダニズムの詩は、デパートや映画館が建ち並ぶ街路を闊歩するモダンガールやモボのゆらぎとともにあり、そこには、音楽、歌劇、映画、写真、絵画など他分野のはなやぎがもんどりうって押し寄せていた（先の『神戸のモダニズム』の関連年表では三宮周辺のダンスホールをピックアップ）。詩の同人誌をみても同じである。君本昌久と安水稔和が作成した詩の年表の一九三二年（満洲事変勃発）から三三年（第一次『四季』創刊）、まさに創刊のラッシュである。しかもシュルレアリスムなどのレスプリ・スーポーの波を浴び、山本氏の指摘の通りである。では竹中郁の二〇年代と三〇年代はどうか。パリに赴く前の二〇年代、ダダや構成主義をとり入れていた岡本唐貴や浅野孟府らとのパフォーマンス、三宮神社境内のカフェ・ガスでアポリネール六年忌の詩の展覧会開催。この尖端的な精神は、三〇年代には明らかに影をひそめてしまった。

その二〇年代のアヴァンギャルドの思潮だが、神戸にも芽生えていた。マヴォ関西支部の牧寿雄主催の萩原恭次郎の第一詩集『死刑宣告』の出版記念会が湊川神社の前のカフェ・ブラジルで開かれていたからである。では、半裸状態で逆立ち、女装してダンスに興じる村山知義らのマヴォを神戸にひきこんだ詩人は誰か。詩人ではなく、神戸ロンダ組のアナキストだったのか。いまだ不明だが、アヴァンギャルドの地盤はまぎれもなく存在していたのである。

ところで最晩年の竹中は、化け物屋敷と呼ばれていた原田の西洋館で前衛劇を試みたこと、相当にいやがっていたのではないのか。それは室生犀星のように、晩年に自らの若書きを改作したことに繋がるのか。いや違う、敗戦をモダニズムの敗北と受けとめ直す、

深く激しい拒絶だったとおもうがいかがであろう。

それにしても、足立巻一が描く『評伝竹中郁』理論社）死を前にした竹中郁は難解である。それはこうである。「入院中、見舞いに何うと、「自分には『動物磁気』と『ボルカ マズルカ』との二冊があればいい。全詩集はいらない」ともらした。（中略）それを口に出した瞬間、竹中の表情が一変したのである。わたしはあわててしまい、病院を飛び出したのである。わたしは帰りの自動車のなかで、竹中の泣き出しそうな顔がひどく気がかりになり、『全詩集』のこゝを持ち出したのを悔いた。泣き出しそうな表情、痛切である。二〇年代や三〇年代の作品をなぜ抹殺したかったのか。足立巻一の衝撃と悔い、ぼくにもずしり残され、あらたな思考を促される。

〔註〕

引用は山田俊幸「竹中郁論」（『都市モダニズムの奔流』翰林書房、所収）。帝塚山学院大学教授。なお同大学ホールで三月三十日「普段着の杉山平一先生」というタイトルで山田俊幸氏と杉山氏の長女の木股初美氏のトークがあった。両氏に関しては『びーぐる』第十七号二〇一二年十月、特集・杉山平一参照。



竹中郁

会員の詩集評

時里 二郎

紫野京子『切り岸まで』（砂子屋書房）。第8詩集になる。生と死、此岸と彼岸との往還によってもたらされる深い陰影に充ちた抒情の世界がここにある。紫野さんの魂に濯がれた言葉が奏でる音楽もまた、この詩集の収穫である。前半は濃密な死の影に彩られ、死の世界へと魂は誘われがちである。ただし、死を考へることは生を考へることにほかならない。遠くを見つめる眼差しは、自らの魂の井戸を深く見つめることでもある。後半は日常に見つけた小さな日溜まりのような生の瞬間をとらえて、死や彼岸に傾きがちであった彼女の魂が、詩によって生きるこの意味を恢復していくさまがうたわれる。

和比古『擬人の構図』（ユニウス）。第四詩集。パステル画との詩画集である。あたたかいグラデーシオン、その淡い色調から深みのある色に変容していくかたち。見ていて心がほっとすると同時に、絵の深みに引き込まれてしまう。この画だけで、ことばのない《詩》としての魅力は十分にある。言葉の詩のほうは、社会への批判的な眼差しがあり、権力への嫌悪に充ちた物言いがあり、木や道や石や花や蝶を寓意的にとらえる視点がある。それらは画の優しさ、ぬくもりとはまた違うトーンを響かせている。画に盛り込むことのできない、人への強い思い入れや社会への関心が和比古さんに詩を書かせるのだろう。そう思いながらも、彼のパステル画には「言葉の詩」にはない「見えない言葉（詩）」が潜んでいるように思われる。画だけの画集も見てみたい思いに駆られる。

佐藤勝太『名残の夢』（コールサック社）。第13詩集。昨年『ことばの影』を上梓なさったばかり。その旺盛な詩作意欲にはただただ驚くばかりである。あとがきに、「いまや三度の食事に次いで、日課のように書き連ねることで、生きる実感となっています。」とある。私

が何より強くひかれた作品は「ことばの花火」。「老いた私には／花火のような言葉はもう出ない／それでも咽の奥で燦のように／火種を探している／略／いつの日か今日まで隠している／心奥に潜んでいるものを／引きずり出して花火のように／咲かせたいと／略」。おかしみやペーソスを含みながらも、詩や言葉に対する執念のようなものさえ感じさせる。

野田かおり『宇宙（そら）の箱』（澤標）。第一詩集。野田さんの詩は誰かとの交信だ。しかも相手は、誰とは名指しすることはできない。そういう強い発信性を帯びた言葉だ。それは共感してくれる他者でも、過去の自分自身でもなく、未来の自分への交信だと言ってみることは可能かもしれない。なぜ交信しているのかといえば、自分という存在の光を確かなものにするためだ。「みずうみ」という詩がある。みずうみを泳いでいるときの自らの息の「まあるい光」をモチーフに、彼女の孤独な日常を静かな物語の切れ端にして語り、やがて自らの生の根元にある家族の生との繋がりに気づき、自分の存在の光をとらえ直すという心魅かれる作品だが、どの作品も言葉に溺れず、自らの生を見つめきる強さと、それを語り続けることのできる言葉の肺活量を備えている。何よりも、「夕陽をぐるつと／パターナイフでえぐるような痛みが／掃り道にあつたこと」（「みずうみ」というような）でも鋭く、繊細な感性が随所に光る。確かな手ごたえと存在感をもった詩人の誕生を讃えたい。

望月逸子『分かれ道』（コールサック社）。声のための詩集だ。第一詩集だが、すでに望月さんには、詩を音楽とともに朗読するという試みの長い詩歴がある。詩のなかに「母の胎内の命の種であったときから／わたしは一本の弦をもっている」（「たいせつなもの」）というフレーズがある。いままで出会ってきた人たちが、自然や、社会に巣くう問題などに対して、この「一本の弦」は、実に敏感に、繊細に共鳴して言葉を紡いでいる。私には、むしろ音楽の力を頼まずに言葉だけで踏み出す試みの第一歩が、この第一詩集上梓の意味

するところではないかと臆測しているのだが。

森田美千代『寒風（かぜ）の中の合図（シグナル）』（澤標）。森田さんの第一詩集だが、すでに詩（言葉）が、沈黙を育むこと、言い換えれば、詩が届かない世界のあることを胸に畳んで作品に向かっている。冒頭の「沈黙の欠片」に「いま／不在を同化させ／沈黙にさわる／ただ／それだけの手ごたえ／声はなく／音はなく／ゆらゆらと／ただ／それだけの」というフレーズや、「牛の眼」の最終部、「夏の暑さが去り／遠い折々の季節／まだ残っている／眼に繋がれる／別れが／小刻みに震える／空気の先」。その「空気の先」は決して言葉は届かないことを彼女は深く実感している。おそらく詩は、そうした言葉の届かないところを言葉によって発見し、包み込む営為なのだ。詩を書き始めた彼女は、多く故郷の山形のことに触れている。詩を書くことが、今まで生きてきた時間をもう一度生き直すことなのだという感慨が読む者に伝わってくる。

安水稔和『声をあげよう 言葉を出そう』（神戸新聞総合出版センター）。一九八五年秋から二〇一五年春まで書き続けてきた神戸新聞読者文芸選者随想を集めた「百編」を収める。タイトルは「阪神・淡路大震災直後に読者文芸投稿者に投稿をうながすために書かれた一篇」から採られている。兵庫の詩の土壌に播かれた安水さんの、詩やことばへの深い敬愛の思いを改めて思う一冊である。なおこの欄の選者は富田碎花、竹中郁、杉山平一、足立巻一、安水稔和とつづいている。けれど兵庫の詩の山脈を仰ぐ思いがする。

鈴木渚『連句茶話』（編集工房ノア）。鈴木さんの連句への傾倒は夙に知られるところだ。そこには、現代詩にたいする彼の深い失望がある。連句は現代詩への彼の批評なのである。連句に関するエッセイ集だが、実にわかりやすく、連句の妙味が披露されている。何よりも先人たちの具体例に基づいた論であり、また東西の文学の視野からとらえた連句観であるだけに説得力があり、連句への誘いの書としての魅力も十分秘めた好著である。

◇常任理事會報告

■十月二十七日第四回常任理事会、私学会館にて。常任理事九名出席。二十周年記念号に向けての会員への情報提供、見本等について。アートコレクション展チラシ検討。第九回読書会（二月二十日午後一時）私学会館。「草野心平」コーナー・高谷和幸）文学紀行（三月六日。飛鳥方面に決定。参加費七千円。第二十回定期総会（五月八日・ラッセホール）

■二月七日第五回常任理事会、私学会館にて。常任理事九名出席。会報三十九号―七月一日発行。二十周年記念号（年表への協力要請。発行後出版記念もかねてパーティを企画）アートコレクション展報告（講演会参加者七十二名。作品展示十九名、見学者総数百六十名）第二十回総会（講演・永井ますみ氏）二十七年事業報告及び二十八年度事業計画の検討。（詩のフェスタひょうご）講師の検討。次年度は、二十周年記念号発行と記念パーティのため、文学紀行及び二月の読書会は行わない）

■四月十日第六回常任理事会、私学会館にて。常任理事九名出席。総会に向けての討議（出席予定者三十一名。会計報告・事業報告・次年度事業計画などの検討。総会役割分担と後援者確認。朗読会参加者の依頼）二十周年記念号途中経過報告（年表作成への、本人及び会員からの情報提供現状。年表は八月中旬初校、通常ページは十一月初校の予定。会員には一冊無料配布）文学紀行（参加者十八名。次回からの検討事項など）三十九号会報は七月一日発行予定。会則の変更など（郵便局からの要請で会計宅の住所を明記する。付則の変更事項―総会にて提案）

■五月二十二日新年度第一回常任理事会、私学会館にて。常任理事八名出席。総会後会計報告及び総会報告。入退会報告。ホームページ・アンソロジーの進捗状況の確認。第十回読書会（七月三十一日午後一時）私学会館。「高橋睦郎」コーナー・時里二郎。第十一回は十一月予定。ポエム&アートコレクション展は二〇一七年一月十四〜二十四日。搬入は十四日午前中、搬出

は二十四日午後。講演は「兵庫の詩人シリーズ」とする。対象詩人は「君本昌久」「竹中郁」が候補であるが未定。講演後は音楽を取り入れた企画を検討中。二十周年記念祝賀会は二〇一七年三月十八日、風月堂ホールで検討。
(尾崎 美紀)

◇新入会員

信定 和美(のぶさだかずみ)

〒666-0116 川西市水明台2-2-38
電話 072(793)5278

油井 和代(ゆいかずよ)

〒651-2244 神戸市西区井吹台北町
1-17-1-307

野田 かおり(のしかおり)

〒671-1224 姫路市網干区津市場679-5
グレイス1-202
電話 090(8196)7766

◇会員の住所変更

佐野博美

〒663-8125 西宮市小松西町2-1-1-903
電話 0798(55)4031

時安善子

〒650-0044 神戸市中央区東川崎町
1-5-9-502

◇会員の動静

香山雅代

平成25年11月15日第26回富田碎花顕彰会祝賀会で講演
演題「瞬きの詩学―露の拍子」、日常にみる能の世界。

内田正美

第三回かなざわ現代詩コンクールで最優秀受賞。

◇事務局より

今年度は役員改選の年となっています。一二月の会報により告知・投票となり、一月に結果を常任理事会にて報告した後、検討・承諾を得る。会員発行の著書、詩誌などの出版物は事務局へお送りください。

◇会計より

今年度会費を同封した振込用紙にて速やかに納めください。
年会費は4000円です。

郵便振替口座00920・9・111243
口座名 兵庫県現代詩協会

お忘れのないようによろしくお願いいたします。
前年度まで未納の方は速やかに納入をお願いします。

※協力金

坂本久乃・鈴木漠・江口節・田中敏弘・伊勢田史郎・直原弘道・安水稔和・福井久子・鳥巢郁美・他1名
合計38,244円 ありがとうございます。

◇会報担当より

会報へのエッセイや詩の投稿をお寄せください。また、会員の受賞や、活動報告などの情報も是非会報担当までお送りください。
この号から会報担当は大西隆志に変わりました。どうぞよろしく願いたします。

大西隆志

〒670-0061 姫路市西今宿3-1-9-702

メールアドレス furadou@extra.ocn.ne.jp
furadou.t@gmail.com (ふらどふか)

◇新入会員をご紹介ください。

退会・住所変更の会員はお知らせください。
連絡先 入退会担当 尾崎美紀
事務局 神田さよ

◇会員の発行書

2015年7月〜2016年5月
 紫野京子詩集『切り岸まで』砂子屋書房
 和比古詩集『擬人の構図』ユニウス
 佐藤勝太詩集『名残の夢』コールサク社
 野田かおり詩集『宇宙の箱』濡標
 望月逸子詩集『分かれ道』コールサク社
 『連句茶話』鈴木漠 編集工房ノア
 森田美千代詩集『寒風(かぜ)のなかの合図(シグナル)』

◇会員の詩誌

ア・テンポ47・48号玉井洋子
 現代詩神戸250〜252号永井ますみ
 木想4号高橋富美子
 月刊めらんじゅ110〜113大橋愛由等
 リフレクション6〜13号川田あひる
 別嬢98号高橋夏男
 Messier 46号香山雅代
 ガーネット77号神尾和寿
 アリゼ169〜172号以倉紘平
 Poetry Edging. 32・33号寺田操
 鳥69足立勝蔵
 Oct3号高谷和幸
 多島海28号江口節
 Contorato 35・36号坂東里美
 風の音10〜11号たかとう匡子
 おたくさH20号(鈴木漠)
 夜凍河22号滝悦子
 花筏29号住吉千代美
 めらんじゅ17号福田知子
 Edging 33号寺田操
 柵田次11号志賀英夫

◇他団体の出版

年刊ふくい、15(福井県詩人懇話会)・宮城の現代詩
 2015(宮城詩人会)・北海道詩集2015年版(北海道詩人協会)・福岡県詩人会163(福岡県詩人会)
 ・呼吸139現代京都詩話会(司由衣)・言葉の花火2015(関西詩人協会 有馬敏)・現代詩手帖(現代詩年鑑2016)(思潮社)・茨城県詩人協会の歩み(茨城県詩人協会)・長野県詩集48(長野県詩人協会)・群馬年刊詩集38号(群馬詩人クラブ)・千葉県詩集・創立50周年記念号(千葉詩人クラブ)・金沢現代詩コンクール受賞作品集(石川詩人会)・日本現代詩人名簿・速報(以倉紘平)・香川県詩集・第19集(竹生淳)・ひょうご文化交流のつどい(公財)兵庫芸術文化協会)・中日詩人集55(中日詩人会)・葡萄59号終刊号(堀内幸枝)・鹿児島県詩集18/19(鹿児島県詩人協会)・火片191(井奥行彦)・岐阜県詩人集3(岐阜県詩人会)・大分県詩集2015(大分詩人協会)・島根年刊詩集第44集(島根県詩人連合)・現代詩2016(日本現代詩人会)

◇他団体の会報

群馬詩人クラブ会報293〜296号(平野秀哉)・詩界通信72号(日本詩人クラブ)・すずかけ10月号(5月号(兵庫県芸術文化協会文化振興課)・福井県詩人懇話会会報90号(渡辺本爾)・岩手県詩人クラブ会報89〜90号(かしわばらくみ)・日本現代詩人会会報140〜142号(新延拳)・長野県詩人協会会報130・131号(山崎庸子)・山形県詩人協会会報16号(こまつかん)・茨城県詩人協会会報21号(裕杏子)・福島県現代詩人会会報111・112号(大田隆夫)・群馬詩人クラブ会報294号(平野秀哉)・大分県詩人協会会報144〜145号(工藤和信)・山形県詩人会会報29号(高橋英司)・鳥取現代詩人会33号(池澤眞一)・島根県詩人連盟会報79号(川辺真)・いちご通信13号(大分県詩人連盟)・岡山詩人協会だより16号(重光はるみ)・宮城県詩人会会報22号(前原正

◇退会

治・石川詩人会会報41号(内田洋) 静岡県詩人126号(篠崎純一)・岐阜県詩人会会報6号(頼圭一郎)・中日詩人会会報185号(岩井昭)・宮城県詩の会会報復刊37号(中島めい子)・北海道詩人140号(北海道詩人協会坂本孝一)・福井県詩人懇話会91号(渡辺本爾)・関西詩人協会会報80〜81号(有馬敏)

森本敏子
 渡辺兼直
 大塚子悠
 福本信子
 大川ひろ子
 清水翠
 西川めぐみ
 井上富美子
 飛鳥聖羅(逝去)
 志賀英夫

★兵庫県現代詩協会事務局／神田さよ
 〒663-8006 西宮市段上町6-14-4
 電話 0798(53)0686

★会計／野口幸雄
 〒667-0846 神戸市灘区岩屋北町 4-4-5-902

★会報編集(39号より)／大西隆志
 〒670-0061 姫路市西今宿3丁目1番9の702

★印刷所／社会福祉法人 新生会 新生会作業所
 〒663-8006 西宮市染殿段町2の11